いつの時代もシンブラ気分
浮世絵や写真にタイムトラベルしてみると

7月は大阪の祭り月である。6月30日の愛染まつりから8月1日の住吉祭までの間、本来、市内各所のどこかで祭りが開かれ、夜店などもにぎわっているはずだが、今年はウイルス感染を警戒し、京都の祇園祭の山鉾巡行や天神祭の船渡御などもとりやめとなり、神職らによる神事のみが執り行われることとなった。

氏子や講の皆さんは言うまでもなく、夏の風物詩を楽しみとしていた市民にもさみしいことである。外出自粛期間中のミナミやキタの繁華街も人通りが少なく、所用で心斎橋筋に行くことがあったが、大半はシャッターがしまって閑散としていた。どれだけ人出が回復しているかは分からないが、店の経営にも大きな影を落としている。

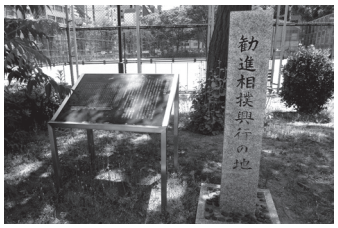
今回は、幕末や大正、昭和初期にさかのぼって、いまの時期、夏の心斎橋筋の賑わいを絵画や写真に見てみよう。

一つは表紙の錦絵「松屋呉服店」である。幕末の大坂を描いた浮世絵の連作「浪花百景」にある作品だが、暖簾に染め抜かれた商標で分かるように、松屋とは現在の大丸心斎橋店である。享保2(1717)年に京都の伏見で創業し、心斎橋には享保11(1726)年に進出した老舗である。

これがなぜ夏の情景かというと、左の通りが心斎橋筋で、女性のみならず男性にも傘をさした人がいる。傘のない人も多いので、雨傘というより日傘だろう。

さらに「浪花百景」には、大丸同様に近代になって呉服店から総合的な百貨店に成長した店が登場している。元禄4(1691)年、江戸から高麗橋(現・中央区)に進出した越後屋を描いた「三井呉服店」(後の三越百貨店)である。薪を運ぶ車や歳末の門付けの芸人とおぼしき人々がいるので、これを冬から新春を準備する情景と解釈すれば、夏の松屋(大丸)と好対照をなすものと想像できる。

もう一つ面白いのが、表紙絵の、心斎橋筋を歩く相撲の力士と思える大きな男である。かつて大坂では、商人の後援を背景とした大坂相撲が江戸以上に盛んだった。興行的な勧進相撲も元禄15(1702)年に堀江(現・西区)で解禁されており、南堀江公園には、大阪市によって「勧進相撲興行の地」の顕彰碑が平成7(1995)年に建てられている。堀江と心斎橋筋は近く、ご贔屓筋に招かれて心斎橋筋に出てきたのかもしれない。



「勧進相撲興行の地」顕彰碑(西区南堀江公園)

一方、近代の心斎橋筋の夏の風物に雨よけ日よけがあった。通りの上を覆う現在のアーケードの原型である。ひもを引くと天幕が出てきて、通りの上を覆った。

「ニッケ」から見た心斎橋筋と雨よけ日よけ(橋爪節也『モダン心斎橋コレクション』より)

写真は、新屋敷(現・心斎橋筋2丁目。宗右衛門町の一筋北側西)の角にあった店のショーウインドーから心斎橋筋を撮影したもの。私のような世代には、子ども時分、近所の市場で見たような懐かしい日よけである。通りの向こうに陶磁器店なども写っている。

昭和24(1949)年に放送開始されたNHKラジオ『上方演芸会』のオープニングテーマ「浪花小唄(道頓堀夜景)」(昭和4(1929)年、作詞・時雨音羽、作曲・佐々紅華)にも、歌詞に「雨よけ」「日よけ」が出てくるが、心斎橋で待ち合わせてショッピングし、道頓堀の劇場や映画館、食べ物屋へとデートする人の流れを、歌の中で立体的に表現しているのだろう。

街の賑わい復活を祈念しつつ、むかしむかしの心斎橋筋の夏にタイムトラベルしてみました。

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葭堂―なにわ 知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の現像―』(創元社)など。